『日本館訳語』の「エ」をめぐって

蔣　垂東

キーワード：「エ」の音価、エ列音節、音訳漢字、口蓋介母、基礎音系

要　旨

明の会同館において、通事養成のためのテキストとして編集された、中国語と日本語との対訳語集『日本館訳語』は、中世日本語の音韻資料として重要視されている。しかし、同書は、資料としてある事実を反映する場合と、積極的な根拠とならず他の資料に根拠を求めざるを得ない場合がある。本稿は後者の一事例を扱うものである。

『日本館訳語』の「エ」については従来その音価がjeと推定されているが、本稿では、同書における「エ」を含む全てのエ列音節の音訳漢字の用法及びその基礎音系に対する再調査を通じて、

『日本館訳語』に関して言えば、「エ」の音訳に用いられた漢字はそれだけでは、日本語の「エ」の音価の再構にとって、積極的な意味を持たない。即ち、当時の「エ」の音価がjeであったとの主張を積極的には支持し得ないものである。

という見解を提示し、これを通して音韻資料としての同書の一面を明らかにする。

1. 問題の所在

母音eに関する次のような一連の変化は日本語音韻史の注目すべき現象の一つである。即ち、この変化では、ア行の「エ(e)」、ヤ行の「エ(je)」、ワ行の「エ(we)」が、e>je、we>jeという過程を経て中世には「エ(je)」に統合されたと推定されている。16世紀から17世紀にかけて外国人の手によって成った多くの外国資料(中国資料、朝鮮資料、キリシタン資料)は当時の「エ」がjeであったことを裏付ける資料と考えられている(注1)。

1549年が成立の下限とされる『日本館訳語』では(注2)、「エ」の音訳に「葉[ɸiɛ]」(注3)「也[ɸiɛ]」(注4)が用いられている。これらの音訳漢字はいずれも[-iɛ]という韻母をもっていることから、 先行研究はjeを写したものと推定している。大友(1963:p.322)は、

「え」に「葉」が当ててあるが、咸摂三等入声の字で、「え」段の音注するのに相応しく、誤字訂正して「也」と考えた仮摂馬韻の「也」が使用されているのと共に、穏当である。…中略…「え」の「葉」は[je]と推察される。

と述べている。福島(1993:pp.191～192)にも、

「日本館訳語」の「エ」をあらわす音訳漢字についてみると、韻書には問題ないし、方言調査についても、北京では、[e]という音は見あたらず、日本語の「エ」が[je]であったことに近い音で音訳されているのであって、 …中略… 。日本語の当時の「エ」に対して、「也・葉」は、それにふさわしかったと考えられる。

との指摘がある。しかし、こうした推定については再検討の余地がある。なぜなら、先行研究では下記の点が必ずしも明らかにされていないからである。

(1)[-iɛ]をもつ音訳漢字の使用状況。即ち、[-iɛ]をもつ音訳漢字は「エ」にしか用いられていないのか、それとも他のエ列音節にも用いられているのか
(2)音訳漢字の基礎音系における[-iɛ]。即ち、日本語のエ列音節のあるものが[e]で、あるものが[je]であった場合、音訳漢字はこれを書き分けることが可能だったかどうか

この二つの点をはっきりさせない限り、音訳漢字に反映された「エ」の音価について説得力のある推定を行うことは不可能であろう。以下では、この二つの点を中心に検討を進めて行きたい。

2. エ列音節の音訳漢字

『日本館訳語』では、「エ」の音訳に、「葉[ʕiɛ]」(「舘驛　葉急尼(エキニ)」)、「也[ʕiɛ]」(「前馬也(マエ)」「内　吾只也(ウチヘ)」)、「エン」の音訳に「言[ʕiɛn]」(「鴛鴦　言約(エンヨウ)」)が使われている。これらの音訳漢字はいずれも口蓋介母[-i̯-]を有し、しかも主母音は[-ɛ]である。一見して、この[iɛ]によって音訳された「エ」の音価を[je]と推定するには問題がなさそうに見える。しかし、結論を下す前に、[-iɛ]をもつ音訳漢字は他のエ列音節にも用いられているかどうかについて見てみる必要があろう。表1はエ列音節の音訳漢字一覧表である。この表から、『日本館訳語』において[-iɛ]をもつ字は「エ」以外のエ列音節の音訳にも用いられているという事実を知ることが出来る。

表1が示すように、『日本館訳語』ではエ列音節の音訳には主として、[-iɛ]([-iɛn])を韻母にもつ字と[-i]を韻母にもつ字が用いられている(注5)。[-iɛ]([-iɛn])をもつ字の用例が圧倒的に多く、しかも、

「竹　答傑(タケ)」「官絹　活見(ホッケン)」「鬚　分傑(ヒゲ)」
「焼茶　扎那哇嗑斜(チャノワカセ)」「一千　亦只先(イチセン)」「銭　熱尼(ゼニ)」「風　刊節(カゼ)」

「寺　貼喇(テラ)」「筆　分貼(フデ)」「天平　殿漂(テンピャウ)」
「猫　聶各(ネコ)」「睡　年不立(ネブリ)」「明年　苗念(ミャウネン)」
「鍋　納別(ナベ)」「片脳　兵卞(ビンベン)」
「梅　吾乜(ウメ)」「綿布　木綿(モメン)」
「習礼　列那納酪(レイノナラウ)」

などとあるように、「エ」以外のエ列音節にも広く見られている。

[表1]『日本館訳語』のエ列音節音訳漢字一覧表（括弧内は延べ用例数）

エ	也 [ʊiɛ](6)、葉 [ʊiɛ](3)	エン　言 [ʊiɛn](1)
ケ	傑 [kiɛ](5)、急 [ki](8)	ケン　見 [kiɛn](1)
ゲ	傑 [kiɛ](1)、急 [ki](1)	
セ	斜 [siɛ](4)	セン　先 [siɛn](2)
ゼ	熱 [ʒiɛ](1)、節 [tsiɛ](6)	
テ	貼 [tʻiɛ](11)、的 [ti](6)	テン　殿 [tiɛn](1)
デ	貼 [tʻiɛ](4)、的 [ti](2)	
ネ	聶 [niɛ](21)、年 [niɛn](1)	ネン　念 [niɛn](2)
ヘ	なし	
ベ	別 [piɛ](6)	
		ベン　卞 [piɛn](1)
メ	乜 [miɛ](18)(注6)、密 [mi](7)	メン　綿 [miɛn](1)
レ	里 [li](1)	
レイ	列 [liɛ](1)	

※用例数はロンドン大学本による

表１の音訳漢字の内、鼻音韻尾[-iɛn]をもつ字が目を引くが、同書ではこうした音訳漢字には二つの用法が見られる。一つは、「鴛鴦　言約(エンヤウ)」「官絹　活見(ホッケン)」「一千　亦只先(イチセン)」「明年　苗念(ミャウネン)」「綿布　木綿(モメン)」などのように、鼻音韻尾で後接する撥音まで示す用法である。もう一つは、「睡　年不立(ネブリ)」に見られるように、鼻音韻尾の鼻音的要素を利用して後接する濁音を際立たせる用法である。また、[-iɛ]([-iɛn])をもつこれらの音訳漢字は中古音で言えば、三等韻と四等韻の開口の字ばかりである。中古音の四等韻は本来直音で口蓋介母がなかったが、三等韻に合流したため、四等韻にも口蓋介母[-i̯-]がつくようになったのは周知の事実である。四等韻に属していた「見、先、貼、節、殿、年、念」に口蓋介母[-i̯-]がついているのは、そうした変化が起きていたからである。なお、[-iɛ]をもつ字は、1例だけだが、「慢　申都盖聶(シヅカニ)」で、イ列音節のニの音訳に用いられている。

一方、[-i]をもつ字「的、里」の用例も散発的ながら以下のような例が存在する。チの音訳に多用される「的[ti]」は、「天陰　唆喇那枯木的(ソラノクモッテ)」「老人　都世的(那)約的(トシノヨッテ)」(注7)「買稿的(カウテ)」「買甚麼　納尼稿的(ナニカウテ)」「斟酒　撒急莫(木)的急答里(サケモッテキタリ)」(注8)「寫字　開的(カイテ)」とある

ように、助詞「て」に延べ6例用いられている(注9)。助詞「て」の音訳には「貼」も「肥各也貼(コエテ)」など3例に用いられている。「的」はこの他に、「弟子　的世(デシ)」「賞賜　非近的木那(ヒキデモノ)」と、デにも2例用いられている。「里[li]」については、レの音訳(「天晴　唆喇那法里(ソラノハレ)(的)」)(注10)に1例用いられている。

エ列音節の音訳に[i]をもつ字が用いられたと思われる例はこの他に、「雨　阿密(アメ)」(延べ6例)、「棗　納都密(ナツメ)」(1例)、「酒　撒急(サケ)」(延べ8例)、「銅銚　非桑急(ヒサゲ)」(1例)がある。これらの訳語の解読をめぐって、先行研究の見解が分かれている。大友(1963:pp. 288～308)、大友・木村(1968:pp. 3～27)は「アメ」「ナツメ」「サケ」「ヒサゲ」と解読しているのに対し、伊波(1932:pp. 53～65)、渡辺(1961:pp. 16～28)、福島(1993:pp. 397～409)は共に「アミ」「ナツミ」「サキ」「ヒサギ」としている。「的」のテ・デ、「里」のレへの用法を認めながら、「密[mi]」のメ、「急[ki]」のケ・ゲへの用法を認めないのは、説得力のある説明がしにくいように思われる。

イ列音節の音訳に多用される「的、里」などがエ列音節の音訳にも用いられることは、たとえ用例数が少なくても問題とすべきある。口蓋性と前舌性を有する点で[-i]と[-iɛ]が共通していることが原因として考えられる。

結局、例外を除けば、エ列音節の音訳には、主として[-iɛ]をもつ字が使われているということになる。

以上で明らかになったように、『日本館訳語』では[-iɛ]をもつ音訳漢字が使われたのは多くのエ列音節に見られる共通の現象であり、決して特定の音節のみに限るものではないことが明白である。この事実に基づけば、「エ」のみを[je]と推定することはできないと言わざるを得ない。

ところで、エ列音節の音訳に口蓋介母をもつ[-iɛ]([-iɛn])の字が多用されたということからは、eが後接する子音にも口蓋化が起きていたことが考えられる。これが事実ならば、散発的でありながら、「的、里」など[-i]をもつ字がエ列音節の音訳に用いられたのは、そうした口蓋的要素を強くとらえた例として見ることが可能であり、これによって「的」のテ・デ、「里」のレへの用法をうまく説明することができる。しかし、このように考える前に、音訳漢字の[-iɛ]は確かに[je]を写したものかどうかについての検証が必要である。そのために、[-iɛ]を取り巻く『日本館訳語』音訳漢字の基礎音系の状況を明らかにしなければならない。

3. 基礎音系における[-iɛ]

橋本(1942:pp. 348～349)は中国資料に反映する「エ」の音価について、『書史会要』と『日本寄語』の実例を示しつつ(注11)、

吉野時代から室町末にいたる間には、シナ人が日本語を書いたものがあつて、それには大抵ieの音であるやうであるが、その同じ方言にe又はこれに近い音があつたかどうか、まだわからないので、日本語がyeであつた為にieと書いたか、又はeであつたけれども、それに正しく當る音が無かつた故これに近いieといふ文字を用ゐたか、まだ確かでない。

と述べ、基礎音系を解明しなければ、中国資料が証拠として使えないことを指摘している。これに対し、福島(1993:pp.191～192)は次のように述べている。

橋本氏によれば、中国資料において、「エ」をあらわす漢字は、[je]であったというポジテイブな証明にいたり得ないというのであるが、はたしてそう言えるであろうか。

「日本館訳語」の「エ」をあらわす音訳漢字についてみると、韻書には問題ないし、方言調査についても、北京では、[e]という音は見当たらず、日本語の「エ」が [je]であったことに近い音で音訳されているのであって、橋本氏のは、慎重すぎた考え方のようである。日本語の当時の「エ」に対して、「也・葉」は、それにふさわしかったと考えられる。

福島(1993)では、[e]についての言及は現代北京方言に止まっており、音訳漢字の基礎音系に及んでいない。やはり橋本(1942)の指摘の通り、基礎音系に[e]があったかどうかについて慎重に検討する必要があろう。橋本(1942)の指摘に従えば、『日本館訳語』音訳漢字の[-iɛ]については次の二つの場合が考えられる。

(1)基礎音系では、[je]に対応する音訳漢字として[-iɛ]の他に、[e]にあたるX([ɛ]若しくはこれに近い音)もあったのに、[-iɛ]しか使われない場合、エが[je]であった可能性が高い。

(2)基礎音系では、[e]にあたるX([ɛ]若しくはこれに近い音)がなくて、[je]にあたる[-iɛ]しか存在しなかった場合、[-iɛ]は[e]に近い音として音訳に用いられる可能性もあるので、この場合[-iɛ]は[je]をとらえたものか、それとも[e]をとらえたものか、特定することが困難である。

以下では、『日本館訳語』の基礎音系におけるこれら二つの可能性について検討してみよう。

橋本(1942)以降、『日本館訳語』の基礎音系は中国語の北方方言の音系であることが明らかにされた。音訳漢字の解読については、大友(1963)、福島(1993)は主に『中原音韻』(1324年成立)に基づいている。これに対し、蒋(1996a)は、音訳漢字の用法から『中原音

韻』以降の中国語北方方言で起きた音韻変化の特徴をも反映している事実を明らかにし、『日本館訳語』の成立時期(1549年以前)により近い『韻略易通』(1442年成立)や『重訂司馬温公等韻図経』(1606年成立)などの韻書も参考にする必要があることを指摘している。ただし、『重訂司馬温公等韻図経』は『日本館訳語』より半世紀後に成立したもので、同書の推定音の全てがそのまま『日本館訳語』の音訳漢字に当てはまるとは限らない。例えば、陸(1947b)の推定によれば、『重訂司馬温公等韻図経』には単母音[ɛ]が存在していたとされているが、『日本館訳語』では音訳漢字の用法とは一致しない。

通説の如く、『中原音韻』や『韻略易通』などによって反映される当時の北方方言の音系には中古音の単母音[e]がなかった。[je]にあたる[-iɛ]があったが、[e]にあたる単母音[ɛ]はなかった。単母音ではないが、[e]に近いものとして、二重母音[ei]があったが、『日本館訳語』では、「貴[kuei]」(「天鵞　公貴(クグイ)」)などのように、韻尾[-i]も音訳に利用されるので、[e]の代わりとして用いにくい。結局、当時、[e]に一番近かったのは[-iɛ]であったということになる。

陸(1947b)の推定によると、『重訂司馬温公等韻図経』では、[-iɛ]の他に、『中原音韻』や『韻略易通』の時代になかった単母音[ɛ]もあった。陸(1947b:p.69)は、同書の「拙摂第十六開口篇　韻遮者哲宅」について次のように述べている。

> 第三排的元音無疑的是 -iɛ，不但跟今音相同，並且跟切韻音是一脈相伝的。所以第一二排的元音作 ɛ 。現代国語的 ə（喉牙 ʌ ）是後起的。照等字作 tʂɛ 等。

「拙摂第十六開口篇　韻遮者哲宅」の一段目には、中古音の陌・麦・徳韻(唇音を除く)、職韻(正歯音のみ)、二段目には、麻韻(正歯音のみ)、薛韻(舌上音、正歯音のみ)などに属していた字が収録されている。これらの字は北方方言では[ɛ]を経て、[ə]に合流した。『重訂司馬温公等韻図経』の[ɛ]は[ə]に合流する前の状態を示すものと推定されている。従って、この[ɛ]が『日本館訳語』の基礎音系にもあったかどうかをはっきりさせる必要がある。なお、三段目には中古音の三等韻に属していた字が収録されている。

『日本館訳語』の「エ」の音訳に用いられる音訳漢字の内、[-iɛ]を韻母にもつ字は主に「拙摂第十六開口篇　韻遮者哲宅」の三段目(韻母は[-iɛ])、[-iɛn]を韻母にもつ字は主に「山摂第二十開口篇　韻干敢炭談」の三段目(韻母は[-iɛn])に見られるが、唯一ゼ(「銭　熱尼(ゼニ)」)の音訳に用いられる「熱」だけが「拙摂第十六開口篇　韻遮者哲宅」の二段目に含まれている(注12)。陸(1947b:pp.69)の推定によれば、同書における「熱」の音価は[ʐɛ]である。ゼの音訳に用いられる「熱」は、中古音では薛韻日母に属し、『中原音韻』の時代では入声韻尾を失い、[ʒiɛ]になっていたが、250年以上経った『重訂司馬温公等韻図経』の時代ではさらに[ʐɛ]に変化した。「熱」が声母を変え、口蓋介母を失ったのは、『重訂司馬温公等韻図経』の時代に、中国語北方方言で捲舌音化の変化が起きていたからである。この変

化で、中古音の「知・徹・澄・照・穿・牀・審・禅」母が[tʂ, tʂʻ, ʂ]に合流し、日母もまたこれに平行し、捲舌音の[ʐ]に変化していった(注13)。捲舌音の声母は後接する韻母に大きな影響を及ぼした。後接する韻母が [-iɛ][-iən][-iəŋ][-iəu][-iɛu]などの場合は介母を失わせ(主母音が[a][ɛ]のものはその後さらに[ə]に変化)、一種の単母音化を起こした。また、韻母が単母音[-i]の場合は、[-i]が中舌の[ï](注14)に変化した。『重訂司馬温公等韻図経』の時代では、「熱」はこの変化で頭子音が変わり、介母を失ってしまったのである。

しかし、『日本館訳語』の音訳漢字の用法を検討すると、『日本館訳語』では「熱」がすでに[ʐɛ]になっていたとは考えにくい。以下に示す通り、音訳漢字の用法からそう見なすべき理由を見つけることが可能である。

(1)「申[ʃiən]」「升[ʃiəŋ]」が、「慢　申(シ)都(ヅ)盖(カ)聶(ニ)」「四月　升(シ)哇(グワ)的(チ)」で、いずれもシの音訳に用いられている(注15)。しかし、陸(1947b)では『重訂司馬温公等韻図経』の「申」と「升」がそれぞれ[ʂən]・[ʂəŋ]と推定されている。もしこの推定に従えば、非口蓋性子音と中舌母音の[ʂən]・[ʂəŋ]はシの音訳にとって不適切といわざるを得ない。シに使われている以上、単母音化が起きていないと見るのが妥当であろう。

(2)「世[ʃi]」「日[ʒi]」が、「霜　世(シ)莫(モ)」「通事　度(ツウ)日(ジ)」で、シとジの音訳に用いられている。陸(1947b)では『重訂司馬温公等韻図経』の「世」と「日」がそれぞれ[ʂï]・[ʐï]と推定されている。この推定に従えば、非口蓋性子音と中舌母音の[ʂï]・[ʐï]はシ(ジ)の音訳にとって不適切といわざるを得ない。また、「薄　吾(ウ)司(スイ)亦」「醋　寺(ス)」「涼　孫(スメ)司(シ)世」などにおいて、同じ[ï]をもつ「司[sï]」、「寺[sï]」はシの音訳には一切用いられられず、専らスやズなどの音訳に用いられていることもこうした見方を支持している。

(3)「受[ʃiəu]」「少[ʃiɛu]」が、「秀才　哇(ワ)嗑(カ)受(シュ)」「勅書　着(チョク)谷(ショ)少」で、サ行拗音の音訳に用いられている。陸(1947b)では『重訂司馬温公等韻図経』の「受」と「少」がそれぞれ[ʂəu]・[ʂau]と推定されている。この推定に従えば、非口蓋性子音と中舌母音をもつ[ʂəu]・[ʂau]はサ行拗音の音訳にとって不適切と言わざるを得ない。

(4)「柔[ʒiəu]」「遶[ʒiɛu]」が、「十　柔(ジュウ)」「城　遶(ジャウ)」で、ザ行拗音の音訳に用いられている。陸(1947b)に従えば、『重訂司馬温公等韻図経』では、それぞれ[ʐəu]・[ʐpu]となっていた。その通りなら[ʐəu]・[ʐpu]は(3)と同様の理由で拗音の音訳に不適切であることが明白である。

同様のことは、「只[tʃi]」(「土　足(ツ)只(チ)」)、「扎[tʃa]」(「椀　扎(チャワン)萬」)、「照[tʃiɛu]」(「帳幔　嗑(カ)照(チャウ)」)、「着[tʃiɛu]」(「勅書　着(チョク)谷(ショ)少」)などについてもいえる。これらの音訳漢字は陸(1947b)の推定に従えば、『重訂司馬温公等韻図経』では子音は非口蓋性のものに変化しただけでなく、母音もあるものは口蓋介母を失い、また、あるものは前舌的要素を失っ

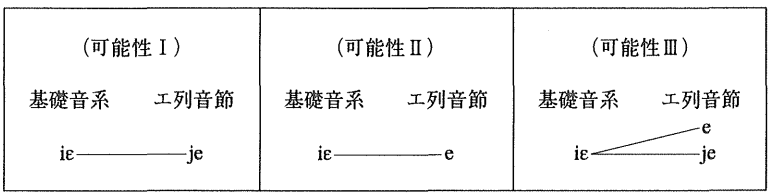
てしまった。チ・ヂやタ行拗音の音訳漢字としてのその用法は、この変化によって適切な説明が得られない。

このように、音訳漢字の使われ方から見て、『日本館訳語』の基礎音系には捲舌音化がまだ起きておらず、「熱」が単母音になっていたとは考えにくい。

結局、音訳漢字の基礎音系では、単母音[ɛ]もなかったため、(日本語の)[e]に最も近かったのは、[-iɛ]であったということになる。イ列音節の音訳漢字に多用される「的、里」など[-i]をもつ字が散発的でありながら、エ列音節に用いられたのは、基礎音系に[e]に対応する単母音がなかったため、[-iɛ]と同じ前舌母音をもつ字「的、里」などが散発的に混じり込んでしまったと考えられよう。

ここで、音訳漢字の基礎音系における[-iɛ]と(日本語の)[e]・[je]との対応関係から図1に示す3通りの可能性が考えられる。

(図1)



可能性Ⅰ エ列の全ての音節が[je]であったため、[-iɛ]で写した

可能性Ⅱ エ列の全ての音節が[e]であったが、基礎音系に[ɛ]がなかったため、これにい[-iɛ]で写した

可能性Ⅲ [e]・[je] 2種類のエ列音節があったが、音訳漢字の基礎音系ではこうした対立がなかったため、全てを[-iɛ]で写した

三種類の可能性が考えられる以上、エ列の音価推定に関してはキリシタン資料など、他の資料に根拠を求めざるを得ない。キリシタン資料については、橋本(1928)以来、エがjeで、それ以外のエ列音節がeであるとの推定が学会の共通認識となっているが、ローランド・ラングには、中世日本語ではエのみならず、全てのエ列音節に口蓋性があったとの指摘があり、柳田(1993)も同様の見方を示している。上に示した『日本館訳語』音訳漢字の可能性Ⅰ～Ⅲの内、可能性Ⅲは橋本説、可能性Ⅰはローランド・ラング説とはそれぞれ矛盾しないが、どちらの説も積極的に反映していない。

以上見てきたように、エ列音節の音訳に用いられる全ての音訳漢字の用法及びその基礎音系に対する再調査を通じて、下記の事実が明らかになった。

(1)[-iɛ]をもつ音訳漢字は「エ」以外のエ列音節の音訳にも広く用いられている。従っ

て、「エ」のみを[je]と推定する積極的な理由はない。

(2)音訳漢字の基礎音系では、日本語の[e]と[je]を書き分けることはできなかった。従って、[-iɛ]を持つ音訳漢字が使われたからといって、「エ」が[je]であったことの根拠にはなり得ない。

4. おわりに

『日本館訳語』は重要な音韻資料であることは確かだが、上記の事実からも、日本語音韻資料として積極的な根拠とならない要素を含んでいる点も注意すべきである。別の機会で詳しく述べるが、『日本館訳語』の音訳漢字はハ行子音が両唇音であったことや、四つ仮名による混同が起きているものの、ジ・ズとヂ・ヅとの区別がなお保たれていたことを反映している。このように資料として積極的な根拠となる部分と、本稿で明らかにされたようなそうでない部分を明らかにすることは、結果的に同書の資料性をより明確にすることになる。

注1　キリシタン資料のローマ字では、「エ」と「エ」を区別せず、全てyeで表しているのに対し、子音と結合するその他のエ列音節は、-eで一定している。キリシタン資料のyeはjeを写したものとされている。朝鮮資料(『(朝鮮板)伊路波』『捷解新語』)では、「エ」を表すハングルには口蓋半母音をもつ['yəi]が用いられ、これもまた[je]を写したものと考えられるが、['yəi]は他のエ列音節にも用いられているため、必ずしも[je]を写したとはいえないとの見方もある。ラング(1971)、柳田(1993)は全てのエ列音節に口蓋化が起きていたとの立場に立ち、亀井(1964)にも類似の指摘がある。これに対し、浜田(1952)には、むしろ[-e]を写したものとしている。また、河野(1952)は、ハングル音韻史の立場から、「'yəiと書かれていても、それが必ずしも投じ日本語のエが[je]と発音したとは断定できない」と指摘している。一方、森田(1973)には、南部朝鮮方言の発言に基づけば、「エ」は[je]、それ以外は[e]、の解釈が可能との指摘がある。

注2　『日本館訳語』の正確な成立年代は定かではない。現存諸本の内、唯一ロンドン大学本に「嘉靖二十八年十一月望通事序班胡涝　褚效良　楊宗仲校正」という識語があることから嘉靖二十八年(1549)が成立の下限とされている。

注3　推定音は陸(1947b)に従う。以下同じ。

注4　各本を通じて、エの音訳にはメと同様の「乜」が用いられている。字体の類似から見て、エに用いられる「乜」は「也」の誤りと考えられているため、本稿では、「也」とする。

注5　この他に、「禄[lu]」がレに2例(「晩　非那谷禄(ヒノクレタ)答」「生　吾馬禄(ウマレテ)貼」)使われる用例も見られる。「禄」は主にル・ロの音訳に用いられる音訳漢字で、レの音訳に用いられるのは例外的な用法である。なお、「生　吾馬禄(ウマレテ)貼」は、ロンドン大学本のみに見られる例で、静嘉堂文庫本、阿波国文庫本、稲葉君山旧蔵本は「吾馬里貼」となっている。

注6　「蓮花　法司乜那法那」「蓮子　法司乜那各」の2例でも「乜」が使われているが、読み方は定かではない。大友(1963)は「ハスミノハナ」「ハスミノコ」としているのに対し、伊波(1932)と福島(1968)は、「乜」を「也」の誤りとしたが、福島(1993)は「乜」を不明としながら、「ハスメノミ」「ハスメ

ノコ」と解読している。渡辺(1961)は「乞」を「衍字」としている。本稿では不明としておく。

注7 「老人」の日本語訳はテキストによって異文がある。ロンドン大学本は「都世的約的」であるのに対し、静嘉堂文庫本、阿波国文庫本、稲葉君山旧蔵本の各本はいずれも「都世那約的」となっている。後者の方が正しい。

注8 「斟酒」の日本語訳はテキストによって異文がある。ロンドン大学本は「撒急莫的急答里」であるのに対し、静嘉堂文庫本、阿波国文庫本、稲葉君山旧蔵本の各本は「撒急木的急答里」である。

注9 「的」の助動詞「て」への用例数はテキストによって違いがある。ロンドン大学本に従えば、6例で、静嘉堂文庫本、阿波国文庫本、稲葉君山旧蔵本に従えば、7例となる。原因は、「天晴」の日本語訳に異文があるからである。ロンドン大学は「唆喇那法里」であるのに対し、他の三本は「唆喇那法里的」となっている。

注10 注9に示した通り、「天晴」の日本語訳はテキストによって異文が認められる。

注11 橋本(1942:p.349)が『日本寄語』の実例として挙げた「言、葉、セ(也?)」は、いずれも『日本館訳語』の例である。(「言」と「葉」の用例は『日本寄語』には見あたらない。)

注12 「拙摂第十六開口篇 韻遮者哲宅」の一段目には中古音徳韻の「徳」が収録されている。徳韻の「得」が1例だけだが、『日本館訳語』の「進貢 嗑得那」に使われている。「嗑得那」は先行研究では様々な解読が試みられている。伊波(1932)は、『篇海類編』の「朝貢使臣 嗑得那使者」に着目して、「皇帝(クワウテイ)の(物)」と解読した。大友(1963)はこれを踏襲している。これに対し、服部(1979)は「嗑」がカの音訳にしか用いられないなど音訳漢字の用法を検討した末、「「皇帝ノ」と読むことは無理で、未詳の語とせざるを得ない」としている。また、渡辺(1961)は「カトノ?」、福島(1993)は「(ミ)カド(帝)ノ」と解読している。

「得」は『中原音韻』では、「徳、肋、勒、黒」など、徳韻に属した字と共に「斉微韻」に見られ、その音価が[-ei]と推定されている(楊1981)。「斉微韻」のこれらの字の多くは『重訂司馬温公等韻図経』「拙摂第十六開口篇 韻遮者哲宅」(韻母は[-ɛ])の一段目に見られるが、「得」と「黒」は、「墨摂第八開口篇 韻盃塁類雷」(韻母は[-ei])にも見られる。現在の北方方言でもそうであるように、これらの字には二通りの読み方があり、『重訂司馬温公等韻図経』はこれを示している。

注13 王(1980)『漢語史稿(上冊)』

注14 [i]は[ʅ]と[ɿ]からなる。[ʅ]は[tʂ, tʂʻ, ʂ, ʐ]の後にしか現れないのに対し、[ɿ]は[ts, tsʻ, s]の後にのみ現れ、両者は相補分布の関係にある。調音点はそれぞれ前にたつ声母と密接に関連している。

注15 前述のように、『日本館訳語』では後接する濁音を際立たせるために直前の音訳漢字に鼻音韻尾をもつ字が用いられる傾向がある。ここの「申」と「升」もそうした用法である。

参考文献

伊波普猷(1932)「『日本館訳語』を紹介す」(『方言』第2巻第9号)

亀井孝他(1965)『日本語の歴史4 移りゆく古代語』平凡社

王 力(1980)『漢語史稿(上冊)』(修訂本)中華書局

大友信一(1963)『室町時代の国語音声の研究』至文堂

大友信一・木村晟(1968)『日本館訳語 本文と索引』洛文社

京都大学文学部国語学国文学研究室編(1968)『纂輯日本訳語』(京都大学国文学会発行)

姜 信沆(1980)「依據朝鮮資料略記近代漢語語音史」(『歴史語言研究所集刊』第51本第3分)

河野六郎(1952)『伊路波の諺文標記に就いて」(『国語国文』21巻10号)

ジョアン・ロドリゲス(1604～8)『日本大文典』(土井忠生訳、1955年)三省堂
蒋　垂東(1996a)「『日本館訳語』の基礎音系――疑母、微母とゼロ声母の関係を中心に――」(『国語学』184集)
蒋　垂東(1996b)「ロンドン大学本『日本館訳語』の識語をめぐって」(『筑波日本語研究』創刊号　筑波大学　文芸・言語研究科　日本語学研究室)
橋本進吉(1942)『国語音韻史』(「第四章　現代標準語の「エ」音節の由来」)(橋本進吉博士著作集第六冊)岩波書店 1967年
服部四郎(1979)「日本祖語について・14」(月刊『言語』1979年4月号)
浜田　敦(1952)「弘治五年朝鮮版伊路波諺文対音攷」(『国語国文』21巻10号)
浜田　敦(1977)「国語史の諸問題 ――四十年の総括――」(『国語国文』46巻5号)
林　史典(1995)『日本語要説(第6章)』(部分増補版)ひつじ書房
福島邦道(1993)『日本館訳語攷』笠間書院
柳田征司(1993)『室町時代語を通して見た日本語音韻史』武蔵野書院
楊　耐思(1981)『中原音韻音系』中国社会科学出版社
森田　武(1973)「捷解新語解題」(『三本対照捷解新語釈文・索引・解題篇』所収　京都大学国文学会発行)
森田　武(1977)「音韻の変遷(3)」(『岩波講座5　音韻』所収)岩波書店
陸　志韋(1947a)「記蘭茂『韻略易通』」(『燕京学報』第32期)
陸　志韋(1947b)「記徐孝『重訂司馬温公等韻図経』」(『燕京学報』第32期)
ローランド・ラング(1971)「文献資料に反映した中世日本語エ列音節の口蓋性」(『国語学』85集)
渡辺三男(1961)「華夷訳語および日本館訳語について(承前)」(駒沢大学文学部研究紀要第19号)

(1997年8月31日　受理)